

命の旅を謳歌する

「今日も、お暑いですねえ…」と、どこへ行っても耳にする『夏の挨拶言葉?』。逆に、この暑さを楽しめることが出来たら良いんですけどね。とは思ってみても、楽しんでるのは子供達くらいなものですね。冬になればなつたで、「夏の暑さと、冬の寒さが同居すればいいのに」なんて我が儘(まま)な事を考へたりしてしまうのも人間の性というものでしょう。

また大自然に目を転じてみると、冬を耐え抜いた草木は、春になれば蕾が姿を現し、綺麗な花を咲かせ、草が萌えいでて、あるいは月が満ちてきます。潮も満ちてきます。それが自然の理というものではないでしょうか。そんな大自然の営みや、恵みに触れた時に、私達は大きな感動を覚える事があります。それは取りも直さず私達自身、大自然の一部だからではないでしょうか?だとすれば、そんな大自然の一部ともいへば私達人間も、同じ様に強い生命力を備えているという事ではないでしょうか?

たとえば、何か辛く苦しい出来事があったとしても、上を向いて愚直に努力を怠らなければ、必ず試練を乗り越える機会に恵まれます。そして、実りある「世界でたった一つの綺麗な花」を咲き誇らせる時が来るというものです。

北風が吹きすさび、雪が重く降り積もった下に、草の萌え出る芽が必ず、息づいています。寒い冬を耐え忍んで克服した時に、必ず春は訪れます。東日本大震災の瓦礫の山中で、春の訪れを知らせる桜が凜として咲き出したニュースを目にした時に、私達も大自然から学ばなければいけない事が沢山あると思ひ知らされました。

誰しも色々な苦しみを抱えていると思ひますが、一つの物の見方、一つの考え方、強い意志、素直な信仰心を持つてすれば、必ずどんな苦しみからも乗り越えられる時が用意されているものと確信しております。

「心が変われば言葉が変わる。心が変われば行いが変わる。心が変われば縁が広がる」のです。全ては私達の心の有り様です。心の置き所によつて人生の行き先が決まります。何か事に当たつて自分でも不思議

に思う程の力を出せる時というのは、自分が厳しい状況に追い込まれた時、あるいは誰か相手の事を思う「利他の心」が芽生えた時なのではないかと感じます。もし自分が厳しい状況に追い込まれて、なおかつ「利他の心」をもって行動するならば、平生は心の奥底で眠っている「神仏様の心」というものが目を覚まし、本来備えている大自然の力を発揮する力に恵まれるのではないかと思います。

それを私は昨年の百日間の修行で、まざまざと実感する事が出来た様に思ひます。修行中は、一日二食の重湯しか口にせず、睡眠時間も二時間という信じられないほど過酷な修行生活の中で、よくもまあ無事に修行を終えることが出来たものだと、いまだに信じられない気持ちで一杯なのです。身心共に厳しい状況に追い込まれた時に、更にそこで「利他の心」を持つてた時に、心の奥底で眠っている大自然の力なるもの、言い換えれば「神仏様の心」を目覚めさせる要因になるのではないかと感じずにはおられないわけではございません。

そう考えると、人間の真の生命力というものは、甘えのある環境で出

し切れるものではないと言えるのかも知れません。

相田みつをさんの詩に『いのちの根』と題するものがあります：「なみだをこらえて かなしみにたえるとき ぐちをいわずに くるしみにたえるとき いいわけをしないうで だまって批判にたえるとき かりをおさえて じつと屈辱にたえるとき あなたの眼のいろが ふかくなり いのちの根が ふかくなる」と。相田さんが仰る様に、自分の人生に用意された辛苦をありのままに受け止める時に、その先に用意された喜劇というご褒美を味わえるという事なのかも知れません。

謙虚な人ほど感動する。謙虚であればあるほど、感動が深くなります。また、感動するから学びが深くなるのです。そして、学びが深い事で人生の醍醐味を味わえる人間の器が成長するのだと思ひます。逆に謙虚の反対は傲慢であり自信過剰と言えるでしょう。他人の否定的・軽蔑的な言動や態度は周囲に傲慢さを感じさせます。これでは誰もトクをしません。では謙虚になるとはどういう事なのでしょう? 秋の田んぼを想像

すると、「実れば実るほど穂首の垂れる稲穂かな」と。まさに謙虚な人の代名詞とも言うべき格言です。これも大自然の理が私達に教え示して下さっている姿だと思います。

日本を襲った未曾有の大災害がもたらした大きな波紋が渦巻く今だからこそ、私達人間は、皆等しく大自然の一部であるという事を認識し直し、苦しみ悩み多き世の中を、心の奥底に秘めている偉大な生命力を結集し合い、乗り越えていく時なのではないかと思えます。

今月は先祖供養という、命の源を温めるお盆の行事があります。私達の命の源は直接的な両親に始まり、先祖代々の皆々様、果ては魂の故郷へと一直線に続いています。そんな尊い命の根源を目の前にする時、私達は謙虚にならざるを得なくなります。連綿と紡いできた命の継承を頂いている私達は、既に一人ではありませぬ。逆境を目の前に恐れることは何もありませぬ。目の前の人を思い遣る気持ち湧いてくるはずです。気がつけば「命の根」が伸び伸びと張り巡らされている事でしょう。

今ある生かされている命に感謝し、今月も悠々と命の旅を満喫できればいいですね。

合掌 副住職 谷川寛敬

お盆の豆知識

十三日「迎え火」

日が沈んで薄暗くなってきた頃、家の玄関・門などで迎え火を炊きます。これは、故人の霊が家に帰ってくる際、道に迷わないように行われます。麻がらなどを燃やして行います。



十六日「送り火」



外が暗くなってきたら、家の玄関・門などで送り火を炊きます。迎え火と反対に、お盆に帰ってきた故人の霊を現世からあの世へと送り返すために行われます。有名な京都の五山送り火はこの行事を大規模にしたものです。

日等上人(真成寺の御開山) 石碑の清掃無事終了

去る七月二十四日(日)朝五時出発の時点で小雨が降っていた為か参加者は例年になく少数でした。不思議なことに町の方は小雨でしたが、日等上人のお墓付近は、雨一つなく一年に一度の墓清掃に来る我々を待ちかねておられるようでした。

お陰様で無事スムーズに終える事が出来ました。

奉仕者の皆様方の御協力に深謝申し上げます。

参加者

住職・高木昶・経崎博春・

伊藤宗治



日等上人の石碑